

トルコ地震被災者支援「こころのパン 2003」デイルメンデレ・イズミット報告

AICAT 副代表理事 中浜慶和

「こころのパン」プロジェクトは、今回大きな被災地であるデイルメンデレとイズミット両市で開催した。2000年7月から始まったプロジェクトは、各地で開催されるたびに、活動は広がり、今回は、日本の第一線で活躍している現代美術作家により提供された作品展ならびに支援作家とそれぞれの専門家によるライブペインティング、墨絵、写真、押し花、音楽と舞踏、シンポジウムなどかつてない様々なジャンルからなる、最大のワークショップを実施して、地震被災の中から新しい文化交流を誕生させることができた。また、プロフェSSIONALによるプロジェクトのドキュメンタリー撮影や記録写真撮影が行われた。今回は国際交流基金からの貴重な助成を受けることにより、被災支援活動と同時に、大きな人的国際文化交流活動が実現できたことを以下に報告して、国際交流基金に対し、心からの謝意を捧げたい。

期間：2003年7月23日～8月5日

参加者：作家 磯田皓 中津川浩章 細井篤 櫻庭春来

写真家 楠山忠之 加藤智津子 高頭昌子

押し花 三好基子 山根房子 宮首悦子

三線とダンス 松村志野 塚原美穂

ドキュメンタリー撮影 鈴木余位 秋房和伸

AICAT 上田みどり 中浜慶和 イナン・オネル 金子泰紀 遠藤敏郎

小西紀之 内海秀彦

サポーター 櫻庭満里夢 村松あすか 宮首和夫 吉澤和夫 吉澤晴子

現地通訳・調整 Ibrahim Ozalp Sammas Ugurlu 湯川遼子

現地パートナー：Izmit 市立美術館 Degirmendere 市 Mimar Sinan 大学

Canan Curgen Caglayan Ferit Ozsen Ertugrul Akalin

Mehmet Guner Sinan Oner

1. イズミット展

25日17:00からのオープニングには、イズミット自治体ヒクメット・エレンカヤ市長、在イスタンブール日本総領事館の石原猛副領事、デイルメンデレ市のエルトゥールル・アカルン市長、ミマル・シナン大学フィレット・オズシェン教授らが来臨、70人を超える人々に囲まれた中浜が「再びイズミットに戻ってきた」と挨拶すると大きな拍手の歓迎を受けた。同日、デイルメンデレでは国際木彫シンポジウムが閉会式を迎えており、わたしたちも招待を受けた。同シンポジウムには、プロジェクトの支援作家の一人である三木俊治先生が招聘された。日本の二人の助手とともに、ほぼヶ月をかけて制作した作品「宇宙船地球号」がデイルメンデレの海岸公園の一角でわた

したちをひとときわ際立って迎えてくれた。このようにデイルメンデレではあの大地震で海没した多数の作品に代わる創作挑戦を続けている。「こころのパン」を支えて下さっている日本の作家がこれからも同市のシンポジウムに招聘されることを願い、ここにまた新たな交流の芽が生まれたことを喜びたい。日本総領事館の石原副領事が、深夜わたしたちがホテルに帰る市バスまで見送っていただくなど温かな対応に一同感動を覚えた。

イズミット展は昨年 9 月に引き続き 2 回目となる。前回はデイルメンデレとの共同展示であったので全作品の展示ではなかったが、今回と合わせてすべての先生方の作品を展示できたことになる。展示は 8 月 5 日まで開催された。前回来場した人々も多くやって来て、再会を喜び、被災からの復興を眼にすることができた。今回も数多くのメッセージがノートに書き連ねられた。その一部を記す。

- ・ すべてのこの流れは、苦しみをともにしていることを、表現している。

シェルミン

- ・ これらの美しい作品を、そしてメッセージとともに感動しながら眺めました。日本の作家の皆さんに感謝します。これらの作品は、わたしの心の中にずっと残ります。国々の間の支援がこのように継続していくことは、うれしく思います。

ハイレットイン・トゥジュウネル

- ・ わたしの名前はビュシュラーです。この美術館で開かれるどの展示にもやってきます。ひとつも逃したことはありません。時々外国からも人が来て、とてもうれしくなります。すべての作品はとても美しいです。

ビュシュラ - (小学 5 年生)

- ・ 後ろにくっついて、あなたたちの行く所々に、わたしも行きたい。

ナズミエ・サユン

わたしは日本人が大好きです。日本人はかわいらしいし、愛らしいです。わたしはもともと日本人にとっても関心があります。

みなさんが作った絵や彫刻はとても気に入りました。とてもきれいです。

カルデレン・ギュレル (9 歳の少女)

2. デイルメンデレ展 (予定)

竣工が遅れたデイルメンデレ現代美術館ギャラリー (Degirmendere Cagdas Sanatlar Muze Galerisi) は、モザイクタイルの壁面が夏の日でまばゆく光るようであったが、扉、ガラス面、内装が未着工状態であった。遅れた理由は、エルトゥールル・アカルン市長の急遽入院・手術、また設計者と建設業者との調整の手間取りで遅延したことが判明した。しかし、市長は健康を回復し、その後の建設支援も順調に進み、工事はわたしたちが帰国後に再開され、9 月には扉やガラス面が設置され、本年 3 月には内装工事に取り掛かっていることが確認されている。竣工が今回は間に合わなかったが、1 年遅れの今夏に竣工記念展が計画される見込みである。

3. 新たな展示の試み

デイルメンデレ市では、エルトゥールル・アカルン市長の発案で、現代美術に関心と支援を寄せる企業や団体のロビーやギャラリーに、「こころのパン」"Ruhun Gidasi"の作品を展示する試みがなされた。7月30日に訪問したトルコで一番大きなティッシュペーパーの製造会社であるイペキ・キャウット社（トルコ最大の製薬会社エジュザジュバシュのグループ）の玄関ロビーに母袋、川島、久保、中野諸先生の作品が「こころのパン」の趣旨書とともに展示されていた。今後ともこのような企画が実施されることになっており、「こころのパン」はトルコ国内のいつもどこかで開かれていることになる。

4. ライブ・ペインティング

中津川浩章先生により、7月26日、デイルメンデレ、27日にイズミットの公園で開催された。暑い夏の日差しの中で、200×300cmのパネルに向かって一気に1時間の間に描き上げていく。デイルメンデレでは130名を超える人々が制作に参加した。イズミットでも若い作家たちも混じっての熱のこもったライブ・ペインティングだった。中津川氏は短い滞在であったが、集中して街中を巡り歩き、できあがった作品は、3年前に訪問したときから現在復興に向かっていく町の光景や人々の営みを現わしている。それぞれの作品は、デイルメンデレとイズミット両市に寄贈された。被災地で制作された作品から多くの人々が慰めと勇気、そして希望をメッセージとして受け取ってくれたらと願わずにいられなかった。

5. 墨絵とパステル絵

櫻庭春来先生がトルコの人々に日本の墨絵を紹介し、自ら創作してもらおうというワークショップであった。初めて日本の墨を使って、日本の筆で絵を描く体験に多数の参加者が群がり、真剣に取り組んでいる姿が印象的だった。7月26日にデイルメンデレの海岸沿いにあるオープンカフェが会場として提供され、ほぼ50人が、翌27日のイズミット市立美術館の写真倶楽部の部屋が提供され、ここでも40人ほどが参加した。いずれも子供たちが多数集まり、にぎやかなワークショップであった。最初はお手本の馬、茄子、鶏、龍を下敷きにしての模作だったが、たちまちの内に独自に女性の顔、草花、トルコ独特の唐草模様など独創的なデザインや創作が次々と生まれていった。すべての作品は、持って帰るか、美術館に飾られた。珍しい筆なのに、終了の後、勘定してみたら1本も失われることなく、きれいに洗われて戻ってきた。墨と筆は最後の会場であったイズミット市立美術館に寄贈された。館長のジャーナン氏は、今後墨絵の普及に努めたいと語った。

デイルメンデレでは中津川先生が飛び入りで、パステルを多数持参、子供たちと一緒にテーマは自由で絵の創作を行った。面白いことに子供たちに混じって、大人たちまで喜んで参加してきたことだった。前年デイルメンデレで泣き顔の自分の顔を描いた子供たちだったが、今回は明るい基調の風景画が多かったのに、少し心が和んだ

ことを覚えている。

6. 写真

日本ポラロイド社により、10台のカメラと300枚のフィルムの提供を受けて、7月26,27日にデイルメンデレで、8月2,3日はイズミットで、楠山先生、加藤先生の指導の元に、大人も子供も含めて多数の参加者が群がった。テーマは当初は自分の顔を自分が撮影することで始めたが、写真は開放的な創作を求めるものであり、会場から会場のある公園、公園から街中へと撮影が広がっていった。写真がこれほど人々の心を開かせるものかと、深い感銘を受けた。出来上がったポラロイド写真の余白に、「わたしが望むもの」を書いてもらった。デイルメンデレは4万人の小さな町で、子供たちが望むものは、『自由』であり、『日本の友達が欲しい』であり、『たくさんの愛』であり、『失業者(父親のこと)は仕事を見つけ欲しい』といった心に響くメッセージが多かった。人口150万人のイズミットの子供たちは、『ローラースケート』であり、『パソコン』であり、『自転車』など都会らしい望みが顔を覗かせた。子供たちは将来「サッカー選手」「医者」「小児科医」「警官」になりたいと率直な希望を書き、親たちのメッセージには『人生で一番いい気持ちは子供がいることです』、『この子に学校に行つて欲しい(母親は学校に行けなかった)』と胸に訴えるものがあった。写真は2枚ずつ撮影して、1枚は参加者の手元に、1枚はA I C A Tに提供された。参加者は両市でほぼ半数ずつで合計140人を超えた。

デイルメンデレの2日目には、参加している子供たちの気持ちや感想を語り合う「子供会議」を開催。20人の子供たちが集まり、「日本の子供たちと文通がしたい」「日本の「彼女」がほしいなあ。僕は12歳だから11歳の女の子がいいな」といった望みから地震の話にいたるまで、会議は尽きなかった。

高頭昌子氏は、常にカメラを携えてプロジェクト全体を汲まなく撮影された。そのバイタリティーに深謝したい。高頭氏の写真からトルコでのプロジェクトに参加している人々の豊かな表情を見ることになるだろう。

7. 墨と筆による作詩

8月1日にはデイルメンデレで、2日にはイズミットで、参加者が日本の墨と筆で色紙にトルコ語で作詩をして、イナンの翻訳で磯田先生が日本語で書くという、かつてない企画を行った。100枚を用意した色紙が足りないほどであった。参加者は両市で50人に上った。

トルコの人々は小さいときから詩を朗読し、覚える習慣が家庭でも学校でも行われている。そのために子供たちがたどたどしく始めて筆を握って書き上げる作詩には、驚くほど感動的なものが多い。

「わたしは、ボドゥルム(注:トルコ南部の有名な海岸リゾート地)に行きたいなあ。
だけど、無理だろうなあ。
けれど、行きたいなあ。

やっぱり、だめだろうなあ。

でも、行ってみたいなあ。」

真っ先に書いてきた 7 歳の少女の、切ないまでの訴えである。彼女はすばらしい海に面していたデイルメンデレで生まれ、そしてあの大地震に遭遇した。地震によって海は公園を 100m 沖まで沈ませて、ホテルやレストラン、カフェを呑み込んでいった。そんな海のそばにいる少女が、遠い海にあこがれる気持ちをどう感じ取ればいいのかろう。

8 . 押し花

押し花は日本独特の美術である。日本の暑さと湿気が様々な工夫によって、独特の手法が考案させてきたといえる。乾燥地帯が多いトルコでは植物採集はあるが、日本のような押し花はないため、乾燥させた細やかな花々による押し花創作は大きな反響を生んだ。開催は 7 月 26 ,27 日にデイルメンデレのカフェで、イズミットでは 8 月 3 , 4 日に市立美術館の写真倶楽部ホールで、100 人を超える参加を呼んだ。できるだけ多くの人々に制作してもらうために、今回はしおりと葉書に限定したが、三好先生、山根さん、宮首さんの展示作品の精緻さ、色彩感、多様さに参加者たちは驚嘆の声を上げていた。また、紅葉がちりばめられた 10m もの布の作品が入り口に飾られ、来場者は目を奪われていた。

参加者たちはたちまち独創的な作風で、押し花でしおりや葉書を染め上げていった。また、墨と筆でデザインを施したり、自ら工夫を凝らせていくことに、指導者の先生たちは驚嘆していた。天井から櫻庭先生の墨絵を添えた、押し花の団扇が多数吊るされたことも、参加者の関心を呼んだ。

トルコに日本の押し花を普及させるために、4 日のワークショップ終了後に、OSIBANA 普及研修会を開催したところ、9 人もの希望者が現れた。今回は押し花そのものの作り方についての指導を行った。今後の研修のために、多くの押し花と機材がイズミット市立美術館に寄贈された。デイルメンデレからの研修参加者もあったので、両市から押し花がやがてトルコ国内に広まっていくことを期待したい。三好先生は、再度研修会を実施するため、再訪を約束された。ここにまた、被災地の中から、新しい文化交流の芽が誕生したことを実感できた。

9 . 三線とダンス

今回は音楽と舞踏のパフォーマンスが加わった。松村志野氏による(沖縄の)三線と塚原美穂氏による現代舞踏で、デイルメンデレの海岸にある野外劇場で 7 月 30 ,31 日に、イズミットでは 8 月 3 日にはコジャエリ・フェア(40 万㎡もの公園の中に研修施設、展示ホール、遊園施設、レストランなどを有する)で、4 日にはイズミット市立美術館でいずれも 18 : 30 以降から行われた。それぞれ 150 名を超える観客が集まり、三線の独特の音色と歌、それに合わせての自由闊達な舞踏に、大きな拍手と好感がもたらされた。いずれも最後は観衆と一緒にダンスのパフォーマンスが行われ、ともに手を取り、

ダンスに興じた。音楽もまた、人々の心に慰めと、希望を与えるものとなった。

このパフォーマンスのために松村志野氏が日本より持参した、チューブと糸による美術作品を会場に設置し、観衆たちはチューブを自由に動かしながら、空間舞台の一員に加わり、夜の空に心が溶け込んでいった。

10．特別ワークショップ

彫刻家の細井篤先生が急遽、「一息の彫刻」と称するワークショップを提案、デイルメンデレでは7月26, 27日に、イズミットでは8月3, 4日に実施した。デイルメンデレ市内の配管工事会社に飛び込んで、機材の提供と制作を快諾してもらう。参加者のために別途ストローと糸を調達。ストローの一部をカットし糸を通して、ストローの先端に取り付け、息を吹いて糸を空中で大きな輪にするというもので、子供も大人も熱心に工作をして、「一息の彫刻」を宙に作成した。

11．交流会（イスタンブール）

7月28日18:30よりイスタンブールに美術作家、写真家、押し花作家、演奏・舞踏家、映画撮影者ら全員が、「ポエム屋」というカフェで、ミマル・シナン大学フィレット・オズシェン教授、三木先生、写真家のオズジャン氏、市民や美術家たちと交流会をおこなった。テーマは「震災と芸術」で、参加者は3つのグループに分かれて、討論を行った。そこで語られた中で印象に残った言葉のいくつかを書き出しておく。

- ・ 美術、芸術はプロセスで、これは完成していない。
- ・ 美から受ける喜びは人間に生きる力を与える。
- ・ 展示会で被災者の顔を見ていると大きく成功していると感じる。
- ・ このプロジェクトで子供たちが集まって、彫刻に興味を持った。彫刻に子供も参加させたいと思う。
- ・ 言葉の壁はあるが、アートはいろんな場所、心の深いところで見つめあう仕事だから、国の違いを超えた存在だという感じがする。
- ・ 美は独立したものではなく、生活の中にある。
- ・ 芸術は見えないものに影響を与える。
- ・ デイルメンデレ市長は「心のため」に活動を始めたのだ。市長は世界各国からの支援の一部を芸術のために分けた。
- ・ デイルメンデレでは多くの市民が親、子、友人を亡くしている。だから亡くなった人々のイマジネーションが自分たちの頭の中に残っている。そこで、作品を家の近くで見えるようなところに設置して欲しいという希望が寄せられる。
- ・ 地震という災害から二つの国の芸術の交流という「美」が生まれることを発見した。
- ・ 芸術家の活動が「平和」を作る。
- ・ 「生活と芸術」をテーマに美を追求してゆこう。

12．シンポジウム（イズミット）

8月2日14:00から15:40、イズミット市立美術館で、磯田、細井先生、中浜、

イナン、そしてコーディネーター ジャーナン館長により、40 人ほどの参加の元に、シンポジウム「震災と芸術」が開催された。

- ・ 中浜は”Ruhun Gidasi”（「こころのパン」）をどうして誕生させたのか、なぜ行ってきたのか。
- ・ 磯田先生の作品は被災者に何を語りかけようとしているか。
- ・ 細井先生の作品のテーマはなにか。
- ・ イナンはずっとこのプロジェクトにかかわりを持ってきて、何を感しているか。
- ・ 今回、様々なワークショップが実施されたが、先生方にとって、ワークショップはどんな内容だったか。
- ・ 今後の”Ruhun Didasi” について。
- ・ 先生方のこれからのワークに”Ruhun Didasi” はかかわりを持つか。

など、それぞれのスピーカーから熱意のこもった話が展開され、参集した市民、芸術家たちも討議に加わった。

イナンは、「大震災によって私自身の世界観・人生観が大きく変化した。この変化を自己観察しながら、大きな災害が与える文化的な影響を考えてきている。大災害は私たちを大きく変えるものではないか？なぜここで、共に暮らしているかという問いを示唆することではないか？そうであれば、平時において芸術も同様な問いを投げかけているのではないか。災害救援と芸術活動は密接につながっているのではないか。」と感想と同時に問題提起を行った。

13. 図書寄贈

今回、支援作家の図録と、美術関係図書 384 点をデイルメンデレ現代美術館ギャラリーとイズミット市立美術館に寄贈した。特に支援作家の一人である佐野ぬい先生と女子美術大学OB会のみなさまからは多数の図書の寄贈を頂き、深い感謝を申し上げる。

図書は、8月3日にデイルメンデレ市庁舎でエルトゥールル・アカルン市長に、翌4日にはイズミット市立美術館でイズミット市副市長であるシュネル・アルバイラク・タラス女史にAICAT 上田みどり代表理事より寄贈された。同席で上田代表理事より、今後とも毎年日本の作家の図録を贈り続けたいとの話が伝えられ、両氏より熱い謝辞が述べられた。日本の現代美術作家の図録が、トルコの、特に若い作家たちに美の追求の参考となることを期待したい。

14. ドキュメンタリー撮影

鈴木余位氏、秋房和伸氏が今回のプロジェクトのすべての期間にわたり、カメラを回し続けた。撮影時間は22時間に及ぶ。芸術による震災の被災者支援という活動をドキュメンタリー作品として撮影し、「アート・レスキュー」（「こころのパン」の支援者でもある映画プロデューサーの花田良知氏が名付け親）の確立に寄与しようとするものである。両氏はデイルメンデレの今なお残る崩壊したマンション跡地、同じ名前が並ぶ墓地、活断層の跡なども大きな衝撃を受けながら撮影した。

15. 今後の活動について

デイルメンデレ現代美術館ギャラリー竣工記念展

竣工予定が遅れて、今夏に完成することになった。デイルメンデレ市からの報告によって、支援作家を初めとする参加などを企画したい。同市は「こころのパン」寄贈作品を含む所蔵美術品による企画展を開く予定である。

個展

今秋にイズミット市立美術館で、支援作家である流麻二果先生、磯田皓先生の個展を開催する予定である。“Ruhun Gidasi”としては、震災という不幸の中から、美術という新しい芽が萌え出でることを大きな喜びとしている。両氏とも個展のために、新たな作品の制作にとりかかっている。

切手原画展

磯田先生は、切手デザイナーとしても著名であり、来年に日本切手の原画展の開催を企画したい。日本郵政公社やトルコ郵政省など関係機関との調整が必要であるが、かかる企画は珍しく、両国の文化親善の意味からも磯田先生を中心に実現を図りたい。また、在イスタンブール総領事館からも実現の期待が寄せられている。

押し花

押し花は日本特有の美術であり、今回のプロジェクトで大きな反響を呼んだ。OSIBANA をトルコ国内に普及させるために、今回イズミット市立美術館で普及活動希望者を募ったところ、9名の多きに到った。本格的な立ち上げのために、三好先生が来年再訪を予定されており、イズミット市も歓迎の意を表している。在イスタンブール総領事館においても、このような恒久的な両国市民間交流を歓迎しており、AICATとして、トルコ OSIBANA 教室などの組織化と事業運営の支援を目指したい。

映像展

鈴木、秋房氏の製作する「こころのパン」“Ruhun Gidasi”ドキュメンタリー撮影会をデイルメンデレ、イズミットを初め、イスタンブールなど各地においても実施企画を立てる。4年にわたり続いてきた「こころのパン」プロジェクトのドキュメンタリー映画がトルコ国内で紹介されることは、災害と芸術や国際支援のあり方の観点から、また文化交流の視点からも大きな意義があると考えられる。

16. 終わりにあたって

2000年7月のプレ・イグジビションを皮切りに、2002年9月にデイルメンデレ、イズミット、12月にアンカラ、2003年1月にイズミル、3月にイスタンブールと「こころのパン」“Ruhun Gidasi”は継続して実施されてきた。今回で6回目のプロジェクトであった。

なによりもまず、今回参加いただいた日本の方々には感謝を捧げる。上記に報告させていただいたの方々以外にも、支援のために参加された方々がいる。櫻庭満里夢氏は支援作家である父君を支え、ワークショップで積極的な支援をされた。松村あすか氏は志野氏

の母親としてワークショップにも参画された。宮首和夫氏は悦子氏の夫君として押し花ワークショップを支援された。吉澤夫妻の明るい笑顔は私たちの疲れを癒した。AICATとして参加された金子、遠藤両氏はそれぞれの専門的立場からプロジェクトを支え、特に若い小西氏や内海氏は何かを学んだ。

今回も出発前から在日トルコ大使館、在トルコ日本大使館、在イスタンブール日本総領事館から、多くのご指導とご教示を頂いた。特に石原副領事には格別のご配慮とご支援を頂いた。

また、トルコでの人々の励ましや見守りがどれほどわたしに勇気を与えてきたか計り知れない。例えば今回、デイルメンデレで、三人の少年少女に出会った。一人の少年ウール君は、瓦礫の中から救い出された13歳の少年で現在スーパー・ハイスクールに通っている優秀な生徒で、津波の波を見たメフディさんと一緒にわたしに日本のことを何度も英語で話しかけてきた。自転車に乗りながら話しかけてきた別の12歳の少女は、翌日ひとりで歩いているわたしをずっと観察して、迷わないようにパートナーのイナンに知らせていた。イズミットでは見知らぬ4人の少年たちが自分たちの名前を名乗り、次いでわたしの名前を訊ねて、プロジェクトの支援者であることを確認して(どうやら子供たち同士でもネットワークがあるようだ)、手にしていたおやつのパンを二つに割って差し出した。メディアもプロジェクトを支援してくれた。

イスタンブールのPRONT社及びジャーナン氏による広報活動でTV、全国紙や地方紙が“Ruhun Gidasi”の精神を伝えてくれた。7月31日にFMのKYODがライブ・インタビューを求めてきたが、これはジャーナン氏の推挙によるものであった。

デイルメンデレの文化担当のメフメット氏とバハル氏は貧しい自治体の中であって、懸命に裏方で労力を惜しまなかった。決して表立ったところに姿を見せず、わたしがいささかでも躊躇すると、どこからか姿を現わす。イズミットではだれよりもジャーナン氏を措いて他にはいない。彼女はこのプロジェクトのトルコでのプロデューサーといえる。数多く困難を極めたときに、必ずジャーナン氏の顔と手がわたしの前にあった。通訳を務めてくれたイブラヒム氏、シャンマス氏、湯川氏は、無償の行為でプロジェクトそのものを支えてくれた。名前を知らない多くのサポーターも含めて深謝したい。

プロジェクトを立ち上げて以来今までずっと後援いただいた在日トルコ大使館、在トルコ日本大使館、在イスタンブール日本総領事館、広島県、神戸新聞社、そして、様々なサービスや技術、物資の提供と運営資金の援助で支えて頂いた多くの人々、団体、東京電力、ダイキン工業、NTT東日本、美術梱包ヒグチ、新和印刷、旭コムテック、ダイビスを始めとする多数の企業に感謝する。ことに今回は日本ポラロイド社に格別の支援を頂いた。写真の開放性を改めて認識した。また、今回の人的交流であるワークショップのために、助成を頂いた財団法人 国際交流基金に心からの感謝を捧げる。

『わたしは、会わなければならない人々、すべてに出会ってきた。』

